

平成25年度八重山群島病害虫発生予報第11号(2月予報)

I 2月の気象予報

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	40	20	40
平年並	40	40	40
低い(少ない)	20	40	20

(平成26年1月24日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
八重山群島(石垣島)	19.1	21.6	16.9	139.4	82.1

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 2月の発生予報および防除上の注意事項

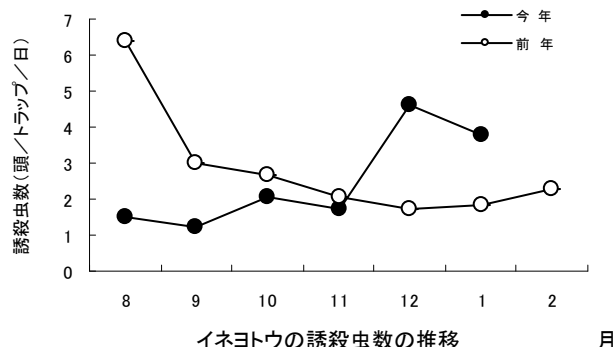
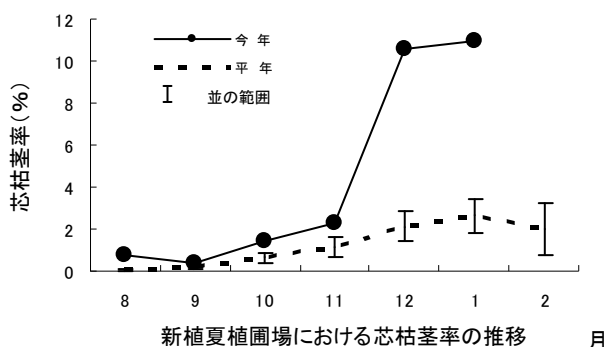
1 さとうきび

(1) イネヨトウ

発生程度 : 多

予報の根拠

- 1月中旬の調査の結果、新植夏植圃場における芯枯茎率は11.0%(前年3.5%、平年2.3%)と平年より高かった。
- 1月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は3.8頭(前年1.9頭)であった。
- 芯枯茎切開調査の結果、確認されたメイチュウ類幼虫のうち96%がイネヨトウであった。

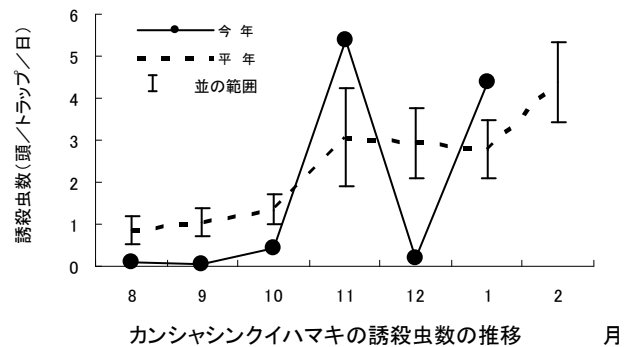
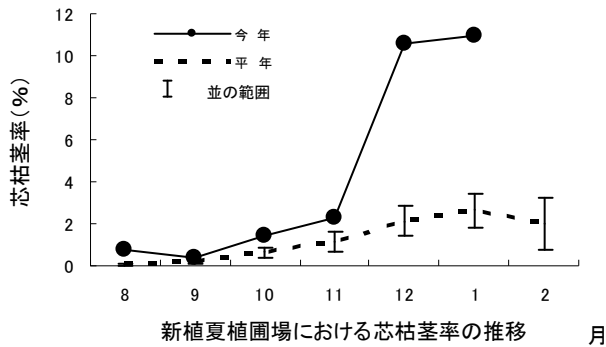


<防除上注意すべき事項>

- ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる
- 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- 圃場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- 乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- 平成25年度病害虫発生予報第6号(平成25年8月30日付)号コラム参照。

○ カンシャシクイハマキの防除対策

- 1月下旬の調査の結果、新植夏植圃場における芯枯茎率は11.0%(前年3.5%、平年2.3%)と平年より高かった。
- 1月のカンシャシクイハマキ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は4.4頭(前年2.0頭、平年0.9頭)と平年よりやや多かった。



<防除上注意すべき事項>

- イネヨトウの防除上注意すべき事項を参照。
- 平成24年度病害虫発生予察技術情報第3号参照(平成24年6月11日付)。

2 マンゴー

○ 炭疽病の防除対策

- 1月下旬の調査の結果、一部圃場で発生していた。
- 剪定残渣は、発生源となるためビニール袋に入れるなどして施設外に持ち出し処分する。
- 施設内の換気を適切に行う。
- 本病は潜在感染するので、開花前後に予防のため薬剤を散布する。
- 平成25年度病害虫発生予報第6号(平成25年11月29日付)号コラム参照。

○ チャノキイロアザミウマの防除対策

- 1月下旬の調査の結果、一部圃場で発生していた。
- 開花期以降は本種が増加する可能性があるため、予防防除に努める。
- 不要な新葉を除去し、ビニール袋に入れるなどして施設外に持ち出し処分する。
- 発生源となる施設内外の雑草を除去する。
- 受粉昆虫に影響の少ない薬剤を選択する。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

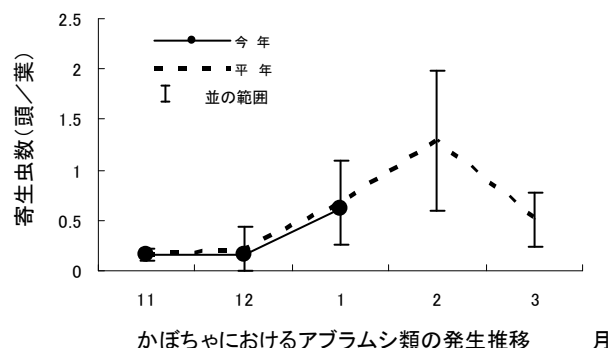
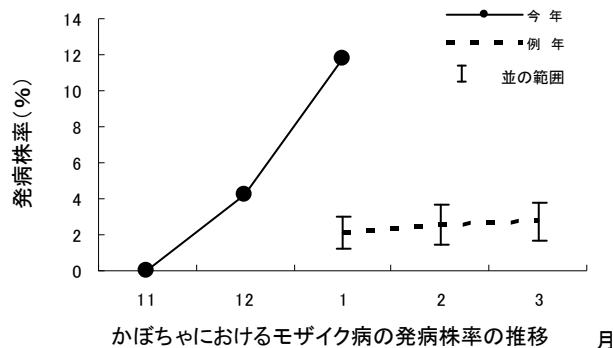
3 かぼちゃ

(1) モザイク病

発生程度 : 多

予報の根拠

1月下旬の調査の結果、発病株率は11.8%(前年4.3%、例年2.1%)と例年よりやや高かった。



<防除上注意すべき事項>

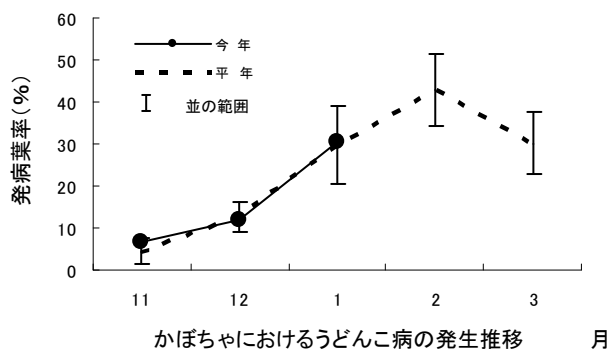
- 媒介虫であるアブラムシ類の葉当たり虫数は0.61頭(前年0頭、平年0.68頭)と平年並で、有翅虫が多く観察された。
- 圃場周辺に防風対策を兼ねた防虫ネット等の資材を利用して有翅虫の飛来侵入を防ぐ。
- 圃場周辺の雑草はアブラムシ類の発生源になるので除去する。
- 発病株は発生源となるので、みつけ次第抜き取りビニール袋に入れるなどして密閉処理し、圃場外へ持ち出し処分する。
- 本病は汁液伝染するので、ハサミや手の消毒、洗浄を行う。
- 収穫後の残渣は発生源となるので速やかに片づける。

(2) うどんこ病

発生程度 : 並

予報の根拠

1月下旬の調査の結果、発病葉率は30.6%(前年28%、平年30.0%)と平年並であった。



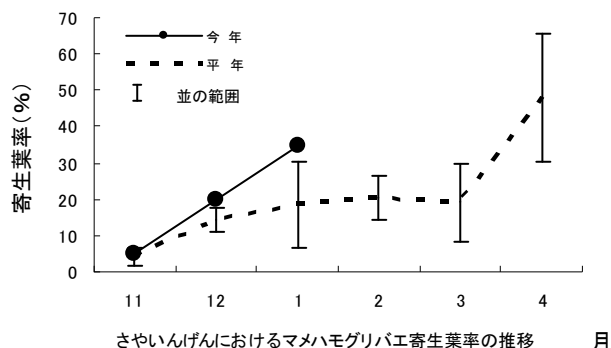
<防除上注意すべき事項>

- 発生源となる株元の不要な老葉・下葉を除去し、透光通風をよくする。
- 着果期以降、草勢の低下に伴い被害が急激に広がる場合があるので防除を徹底する。

4 さやいんげん(施設)

- (1) ハモグリバエ類
発生程度 : やや多
予報の根拠

1月下旬の調査の結果、寄生葉率は34.7%(前年6.0%、平年18.5%)と平年よりやや高かった。



<防除上注意すべき事項>

- 摘葉等による残渣は成虫の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして、圃場外に持ち出し処分する。
- 本種は薬剤抵抗性が発達し、また野外に多数の在来天敵が存在することから、天敵に影響の少ない選択性殺虫剤を使用する。

○ 菌核病の防除対策

- 1月下旬の調査の結果、発病株率は3.1%(前年10.3%、平年9%)と平年よりやや少なかったが、一部圃場で多発していた。
- 例年発生時期に当たるので、予防防除に努める。
- 多湿時に発生しやすいので、不要な老葉・下葉を除去し、透光通風を良くする。
- 発病部位は早めに除去し、ビニール袋に入れるなどして圃場外へ持ち出し処分する。
- 平成25年度病害虫発生予報第10号(1月予報)コラム参照。

○ タバココナジラミの防除対策

- 1月下旬の調査の結果、寄生成虫数は0.1頭未満(前年0頭、平年0.1頭)と平年並であった。
- 本種はさやの白化を引き起こすので、出入口の防虫ネットを二重にするなどして、施設内への飛来侵入を防止する。
- 摘葉等による残渣は、本種の発生源となるので、ビニール袋等に入れ圃場外へ持ち出し処分する。
- 黄色粘着板等を設置し、早期発見・早期防除に努める。